まちのトップアスリート
Athlete
Zoom Up Tome 2016

高橋明輝

Asuka Takahashi

第14回 KENKO CUP 全国ジュニアソフトテニス大会 準優勝（団体）
東郷小6年 南方町南大畑

「試合で緊張したことは一度もないです。試合は楽しかったけど、最後は悔しかった」と落ち着いて話す高橋。

昨年11月21から23日まで千葉県白子町で開催された「第14回KENKO CUP全国ジュニアソフトテニス大会（団体）」に宮城県選抜の一員として出場。大会1カ月前に秋田県で開催された「東北小学生学年別ソフトテニス大会」で優勝し、いい流れで挑んだ全国大会。高橋明輝（あきてる）・大泉快生（かいせい）ペアは、高橋が粘って拾い、大泉が打ちにいくという息の合った得意のパターンで、1ゲームも落とすことなくチームの準優勝に貢献した。

身長154センチと体格は小柄な高橋。だが、全国でベスト8の実力の持ち主だ。

テニスを始めたのは小学1年。高橋が入学と同時に、現コーチの菅原賢（けん）さんと高橋の父（広明（ひろあき）さん）らがスポーツ少年団「南方ジュニアソフトテニス」を設立し活動を始めた。

「テニスをやめたいと思ったことは何度もあります。周りの友達はサッカーや野球をしていたし、テニス人口は少ないんです」と高橋は話す。

テニスに対して消極的だった高橋の転機は小4の夏、仙台青葉ジュニアソフトテニスクラブ所属の大泉選手とのペア結成。毎週末、仙台市と登米市をお互い行き来し、練習を重ね、そのわずか2カ月後には「全国小学生ソフトテニス大会宮城県予選」で優勝。初めて県代表に選抜された。この優勝を機に、高橋はテニスに魅せられ、テニスにのめり込んでいった。

菅原コーチは「技術はもちろん、強い精神力も備え持つ選手。負けず嫌いで、やられても何度も向かっていき粘り勝ちする。また、中学生や南方町ソフトテニス協会での練習参加で確実にレベルアップしており、試合で必要な駆け引きにもたけている」と高橋を高く評する。

今月6日には小学校最後の大きな大会となる「第12回東北小学生インドアソフトテニス大会」で3位に入賞した。

4月から進学する南方中ソフトテニス部は県大会上位の強豪。中学でも高校でも、高橋が目指すのは常に頂点だ。

「好きこそものの上手なれ」人一倍の負けん気とテニスを愛する気持ちで、これからも前へ前へと突き進んでいく。無限の可能性を秘めた彼から今後も目が離せない。

まちの職人
Craft
Zoom Up Tome 2016

阿部克己

2015年度 厚生労働大臣表彰「現代の名工」
東和町米谷5区 昭和32年生まれ

「優秀な技能を持つ人たちがもらえる章。まさか受章できるとは思わなかった。努力してきたことが評価されてうれしい」と笑顔で話す。

11月9日、2015年度現代の名工（卓越した技能者）の表彰式は、東京都内のホテルで開かれ、迫リコーに勤める阿部克己さんが表彰された。

現代の名工は、優れた技能で業界の振興に尽くした人を、厚生労働大臣が表彰するもの。金属材料の製造や加工、機械器具組立の職業など分野は多岐にわたる。

阿部さんは打抜きプレス工の分野で表彰された。ワイヤーカットによる高精度な共（とも）取り工法（一回のプレスで複数の部品を製造する工法）と設計加工ソフトウエアを組み合わせた金型製作システムを構築。従来の金型設計製作時間を40パーセント減らし、穴ピッチ600ミリメートルで誤差5マイクロメートルの精度を達成した。

子どもの頃から「ぜんまい仕掛けのおもちゃの仕組みを知りたくて、わくわくしながら分解した」と機会いじりが好きだった。米谷工業高校機械科に進学後、20歳で迫リコーに入社。入社以来、37年プレス工一筋で、複写機や自動車部品に使われる金型を作り続けてきた。

頭角を現したのは20代半ば。コスト削減の風潮に向かっていた当時、「お世話になっている会社や同僚に恩返ししたい」の一心で、金型製作に没頭。時間を忘れ、深夜まで研究した。

試行錯誤の末、それまで共取り工法では作れない部品の金型製造方法を編み出し、材料費の削減と部品製作時間の短縮を実現させた。

「会社と同僚の理解と協力があったから、金型に没頭できた。迫リコーだからできたこと」と語る。もちろん、個人の努力による部分は大きいが、会社や同僚の協力も力になっている。

「旋盤加工などで作られる部品をプレス加工できれば、経費を抑えられる」。今後はさらなるコスト削減に取り組む。また、「技術は一代で終わらせては意味がない」と、後進の技術指導にも意欲を示す。

「金型製作は、高品質の部品を作るために必要。高品質の部品で組み立てられた商品を消費者に届けたい」

金型製作への挑戦は終わらない。

Katsumi Abe